

華人經濟 経営研究

～彼れを知らず己れを知らざれば戦う毎に必ず殆うし～

中国本土からアジア地域、そして世界にまで活動範囲を拡大するチャイニーズ。彼らのビジネスに対する考え方や習慣は日本人からすると異質にして独特で、理解しづらいものだといわれている。チャイニーズを総合的に「華人」ととらえ、彼らの多様な伝統文化と長い歴史から導き出された経営思想、心理と行動を体系的に分析し、華人圏や中国への進出に伴う総合的なノウハウを学び合う関西日本香港協会のみなさんの研究の成果を紹介する。

CMMS第11期修了

にあたつて



【古田茂美（ふるた・しげみ）さん】香港貿易発展局日本首席代表。国際基督教大学大学院行政学研究科博士前期課程修了（行政学修士M.P.A.）。香港中文大学大学院崇基書院戸部大学大学院経営学研究科博士前期課程修了（経営学修士M.B.A.）。立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程修了（国際関係学博士Ph.D.）。1982年、香港本局に初の日本人スタッフとして入局。大阪事務所長などを経て、2005年より日本首席代表。【日本香港協会全国連合会】<http://www.jhks.gr.jp/>【関西和僑会】<http://kansai-wakyo.com/>

るであろうと予感した者達である。いち早くその根源を知り未来を先取りしようと試みた者たちがCMMSを始めたのである。

より平和的財交換システムで互いの富を拡大させたアジアの歴史的智慧がふんだんに読み取れるのである。

今、世界では、イラクなどのシリアだのウクライナだのと、西欧的戦争システムがデファクトスタンダードのごとく進展しているが、GDPシェアで欧米を抜いたアジアそしてその中心である中国とアセアン、日本や韓国が、かつての72・4%のシェアに近づくとすれば、アジアはどのような国際秩序を形成し世界に影響を与えるのであろうか、上記濱下先生が描くかつての平和と富を並立させたアジアの国際貿易システムを支えた思想や哲学が再浮上すること、一つの選択肢として重要だと筆者は思っている。

復活アジア秩序の芽生えはすでにRCEPやAECに見ることができる。産業

2003年から開講したCMMSが11年目に入り、その第11期は九州会場を加えた3会場として実施したが、この9月25日に無事に終了した。今期は理論編・実践編すべての受講者が3会場合せて37名、部分受講者が9名の合計46名でスタートしたが、その結果、全講義7割出席条件を満たした修了者は29名（東京4名、大阪12名、九州13名）で全体の63%を占めた。比較可能な条件で過去11年間を見ると第9期の66%に次いで二番目に高い数字である。会場ごとの修了比率では九州がトップで100%、大阪が80%、東京が44%であり九州の健闘が目立った第11期であった。

日本には多くの大学が社会人向けビジネススクールなるものを2000年代より開始させているが（院生を排除した社会人だけの大学院）、11年続く社会人スクールはそう多くない。CMMSが大阪で始まり東京に飛び火し九州に拡大して11年目を迎えるとは、11年前開始した本人自身が想像もつかぬことであった。

修了式では受講総括をするのだが、今年は興味深いある統計を皆に披露した。それは西暦1年から2008年までの世界6地域経済による全GDPシェアを示した棒グラフ。6地域とは(1)ヨーロッパ、(2)アメリカ・豪州他周辺国、(3)アジア、(4)旧ソ連、(5)ラテンアメリカ、(6)アフリカである。

(1)と(2)を足して欧米としよ。愕然としたのは産業革命前の1500年にアジアがなんと72・4%ものシェアを持ち、その欧米がなんと9・8%しかなかった事実だ。しかし産業革命後の1870年には欧米は45・1%となり、アジアの40・2%を抜く。

アジアの富の中心が中国であることは明らかだが清朝衰退と欧米によるアジア浸蝕後、1950年までにそのシェアは58・9%（欧米）と19・2%（アジア）と大きく開いていく。そして惨めなアジアの時代が到来する。

戦後から現代に至り世界は再び大きく変わりつつある。中国の改革開放は中国の息を吹き返し、リーマン的な国際秩序観が形成される。

復活アジア秩序の芽生えはすでにRCEPやAECに見ることができる。産業

（このシリーズは2カ月に3回掲載します）